

赭穹の下に灯を提げて

2026-06-11・瀛寰・故事, 於留根, 訶古稜, 血妖

Lanterarium sub Firmamento Ochraceo

^{タイチ}地逸と^{ロマ}露末教廷の間を常に行き来する教士ならば必ず知っているだろう。^{タイチ}南地逸の上空には、穹窿の内側であっても、しばしば淡紅色の空が見える。この景観はとりわけ黄昏時に際立つ。遠方の地平線の上、まるで誰かが病にかかり、血を塗りたくったかのようだ。残る紅の照り返しは、夕日が世界に別れを告げ、このような色彩だけを残して、鐘の音とともに大地に響き渡るのではないかと疑わせる。
^{タイチ}南地逸の詩人は言う：

Wann da ~~H~~acoromer ~~N~~ebel kimmt,
werd aus'm ~~z~~wielicht a roat's gedimmt.

きり渡る
^{ハコロ}訶古稜より来て
紅に染む

^{ロマ}露末北部の^{エリン}乙林＝^{バダン}婆但^{エリン}行省に生息する乙林人は、数百年前からすでに、昼間に遠い空に血赤色の境界を見たならば、五日と経たずに寒波が襲来すると気づいていた。

この赤い霧は一体何物か。凶兆を恐れたり、田んぼを席卷する蟲を心配したり、そんな必要もない。
^{ロマ}露末地方の地図は決して記そうとしないが、この地に生まれ育つ者ならば、西方の人外の国——^{ハコロ}訶古稜公国²を無視することはできない。

濃褐色の空の下、^{アポロ}阿布露³の恩沢の及ばず化外の地、そこが血妖の生息する地、^{ハコロ}訶古稜公国の在る処である。公国領内には至る所に天を突く巨竜血樹⁴が見られる。これらの高き木々が、未知の方法でこの濃褐色の空を維持している。血妖はかくも薄暗い環境に生き、^{オルケン}於留根大陸の地表に住むいかなる種族よりも、光に対して敏感である。ゆえにこの濃褐色の空は、血妖の目には、^{しゃしよく}赭色^{てんきゅう}の天穹として映る。

今から六百年前から八百年前、^{ロマ}露末地方の「二百年大流行」は、恐らく^{ロマ}露末の歴史家がもっとも語りたがらず、しかし避けがたい大災厄であろう。戦乱絶えず、飢饉と疫病が交互に荒れ狂い、一部の地域では屍が野に横たわった。長き二百年、今日であれば、一人の尊敬すべき紳士が三度の輪廻を生きるにも足る。

当時の^{ロマ}露末の諸侯は互いに反目し、城を攻め地を略し、軍が行き来するたび、沿道の集落はことごとく掠奪され尽くし、持ち去れぬものは一把の火で焼き尽くし、敵に片時も資源を残さなかった。貧し

¹乙林＝婆但：Ellin-Badan、^{ロマ}露末北西の沿海行省。ほぼ全^{オルケン}於留根の文明発祥地と言える。

²訶古稜公国：Ducatus Hacolui。単に「訶古稜」と呼ぶ場合は Hacolum。この語の意味は「あの天窓」であるという。

³阿布露：すなわち Apollo、太陽神。

⁴巨竜血樹：Draecana magno。竜血樹に似るが、樹高は百メートルも達する植物。ある物質を放出し、高空中で^{ハコロ}訶古稜公国上方の濃褐色の天空景観を形成する。

き者たちは山に逃げて飢えと寒さに耐え、逃げられぬ者は身代をすべて差し出し、最後には兵伍に身を投じ、己の骸がどこに葬られるかも知らぬままだった。

後に戦争は止んだが、誰も勝たなかった——ただ人の力が尽き、争いを続ける術がなくなっただけである。

しかし戦の終わりがもたらした境況は、いよいよ惨めだった。屍は山と積まれ、戦場に、田畑に。彼らの亡骸を収めんと願う者がいなかったのではない。生きている者たちが、すでにこれほどの重荷を負う余力を持たなかったのだ。

まさにその時、疫病が西風のごとく席卷し、^{ロマ}露末帝国の隅々まで吹き荒れた。^{ロマ}露末大平原を吹き渡り、^{ダノッブ}沱納川⁵に吹き込み、すべての都市、すべての村に吹き込んだ。

まずは高熱が下がらず、身体に腫瘤が生じて急速に広がり、やがて皮膚に恐ろしい黒斑が現れ、五日と経たずに苦しみながら死んだ。この疫病は極めて伝染性が強かった。領民は次々と倒れ、都市の住民の屍は山と積まれた。老人と子供が先に逝き、体の弱い者が続き、やがて壮年の男子すら避けられず、ひっそりと家の中で死に、長く屍臭を放った。無数の集落が人死に屋空となり、屍を収める者もなく、祈りを捧げる者もなかった。不吉の鳥——鴉が、群れをなして梢に圧し、屋根を覆った。

教廷は神意を誤解し、これは聖主真一が世人を試すものなりと宣言した。教廷は遊行を催し、信徒は裸足で砕けた石の上を歩み、むちで互いに殴り合い、「汝に罪あり」「汝に罪あり」と痛呼した。宗教法廷は異端を焼き、動物と異相を捕殺した。我々は知っている、凡人が地獄に堕ちれば、必ず火煉の刑を受けねばならぬと。もしこの世で焼かれれば、死後はその刑を受けることを得ず、ゆえに安息もまた得られぬのである。火刑柱の列は焦げ臭を放ち、人々はこれらの刑具が疫病を連れ去ることを切望した。

しかし疫病は止まらず、世人を顧みることすらなかった。

かくも人間地獄の中、^{テンブラン}占布嵐⁶が目覚めた。ある地域で死者が多すぎると、^{テンブラン}占布嵐の古代文字が次第に光を放つ。^{テンブラン}占布嵐の透明な^{けっけん}血繭が育み始め、一連の^{けっげんりっしや}血源律者が立ち上がった。^{けっげんりっしや}血源律者は^{ぎんゆうりっしや}吟遊律者に似ていたが、もはや調律せず、野原を四方に叫んだ。死にかけた者が^{けっげんりっしや}血源律者の叫びを聞くと、よろめきながら家を飛び出し、恐れも知らぬ医者^{おとば}の看護をも振り切り、歩ける者は歩き、歩けぬ者は這い、^{テンブラン}占布嵐に辿り着く頃には、ある者はすでに血肉がぼろぼろとなり、膝から白骨が覗いていた。

もともと人間は何が起こったのか知らなかった。状況を見に行く勇氣ある者たちと、当時の医者たちに敬意を捧げよう。^{けっげんりっしや}血源律者はこれらの人々を^{けっけん}血繭へと導き、数えきれない刃が突き刺された。^{おとば}音楽文字が蛆虫のように、彼らの皮膚を這い巡った。彼らは^{けっけん}血繭の中で痙攣し、ねじれ、昏睡の中で戦慄した——

そして^{けっけん}血繭から這い出た後、血妖として己の新しい命を迎えた。

これらの者——これらの存在は、もはや人間ではなかった。しかし彼らはすべてを覚えていた。己の名も、家族の顔も、故郷の景色も、いかに言葉を話すことも。ただ、彼らの心臓はもはや鼓動していなかった。

^{ダノッブ}⁵沱納川：Danop、^{ロマ}露末地方もっとも重要な河川。

^{テンブラン}⁶占布嵐：templum、古代の廃棄聖堂。古文明の遺跡であるという。

これが血妖の起源であった。彼らは古代文明と現代の苦難が共に創り出した存在、絶望と死の隙間から催生された希望であった。もし二百年大流行が露^{ロマ}末地方のすべての人々の最も深重な傷であるならば、血妖はその傷口に残した傷跡であった。

しかし世俗の目はこれを見なかった。彼らは血妖が血を飲み、血妖が光を畏れ、血妖の心が鼓動していないことだけを知っていた。彼らは忘れていた、血妖もかつては人であり、かつてこの土地に生きていた者であり、ある者は己の隣人、さらには血縁であったことを。彼らは血妖を「怪物」と呼んだ。かくして血妖は村から追い出され、都市から追放され、かつての身分を剥奪された。教廷は血妖の存在そのものが罪であると宣言した。多くの者が街で一人の人間——顔の青白く、頭巾を被った血妖を見ると、向きを変えて立ち去り、罵倒を一つ投げかけるだけだった。

血妖はただ逃れた。かつての住まいから逃れ、己の記憶の中のすべてから逃れた。

後の後に——二百年大流行の終わりに、血妖に転化された魯迦^{ルキア}・底捻魯宰^{テネブロス}7公爵夫人が、巨竜血樹を用いて「天穹^{てんきゅう}」を製造する方法を見出した。それによって血妖は、完全に正常な生活を営める場所を得た。疫病から命を取り留めたこれらの者たちは、底捻魯宰公爵^{テネブロス}が建てた訶古稜公国^{ハコロ}で畜産業を発展させ、食料源を解決した後、ついに血妖自身の社会を動かし始めた。血妖は父親の血液をある特別な方法で吸収し、母親が懐胎を完成させる。ゆえに血妖の継承はほとんど完全に母親によってなされ、血妖の社会は女性主導の母系社会となった。

これが訶古稜公国^{ハコロ}の由来であった。

訶古稜公国^{ハコロ}の北西、天を突く櫟の群れを背景に、大河がひとすじ蛇行している。流れのほとんどは平坦な地をゆくが、ひとつの曲がり角で岸を削り、一隅の崖を現した。対岸から見れば、孤高の崖の上に尖塔の城が聳えているのが分かる。赭穹^{しゃきゅう}の下^下の厳しい光量のせいで、その姿はただ淡い輪郭としてしか見えない。流れは速くはないが、風のある日には、幾重にも重なるざわめきが絶えず聞こえてくる。黒森林の木々が互いに絡み合い、この地の数少ない便りを囁き交わしているのだ。

見上げれば、城はずいぶん大きいように思える。だが実際の大きさでいえば、芒偶佐其亜^{マングサキア}8邸^{ハコロ}は訶古稜公国領内でも特に際立ったものではない。ここは公国北西の黒森林の縁、高原の山々の麓、帰咽川^{クイエス}9の畔である。帰咽川^{クイエス}をさらに東へ遡れば、帰咽維那突川^{クイエイヴェナトゥス}10と呼ばれる。この川は冥河とも呼ばれ、血妖たちは、血妖が死ぬ時、その魂は必ず帰咽川^{クイエス}を伝って露^{ロマ}末地方へ流れ帰ると信じている。

芒偶佐其亜領^{マングサキア}は、南の血妖貴族のように広大な牧場や集落を構えてはいない。黒森林の木々の根はどこまでも頑なで、芒偶佐其亜領^{マングサキア}の暮らしを圧迫している。領民たちは城の周りに散らばって住み、僅かな家畜を養い、折に触れて森の獣や怪物を狩り、櫟の実を拾い、或いは帰咽川^{クイエス}を行き交う商船と取引して生計を立てていた。

⁷魯迦・底捻魯宰^{ルキア テネブロス}：Lucia Tenebrosus。

⁸芒偶佐其亜^{マングサキア}：Mangusacia。

⁹帰咽川^{クイエス}：Quies。

¹⁰帰咽維那突川^{クイエイヴェナトゥス}：Quiei Venatus。

芒偶佐其垂マングサキアという姓は、公国の「古来よりある」姓氏には連なっていない。六百年前、底捻魯翠公爵デネブロス夫人が訶古稜姐妹会ハコロンを興して以来、公国の諸家が次第に形を成していった。その中に克倫須丹因カルンスタンイン¹¹家の名もあった。それから百年後、東の境で「異端狩り」の地逸軍が押し寄せた時、公国北東の克倫須丹因家は身を守るため、一族の一部を黒森林の彼方へと分け、帰咽川クイエスの上流に分家芒偶佐其垂マングサキアを興し、克倫須丹因本家と遥かに対峙した。五百年の間、芒偶佐其垂は常に克倫須丹因の分家であることを旨とし、克倫須丹因本家カルンスタンインが年に一度の晩餐会を催す折には必ず使者を送り、分家としての務めを果たしてきた。

そして芒偶佐其垂分家の務めとなると、少々話が長くなる。

芒偶佐其垂家の先駆け、叩露那・芒偶佐其垂マングサキア¹²（当時はまだ叩露那・克倫須丹因カルンスタンインと名乗っていた）は、家主娶迷羅・克倫須丹因カミラ カルンスタンイン¹³の命を受け、北へ向かった。訶古稜の境、黒森林の縁に至り、捨てられた城を見つけ出したのであった。伝えられるところによれば、ここはかつてとある一族の領地であった。満月の夜、その一族が東へ遠征に出発したきり、誰ひとり戻らなかったという。残された数人の血妖——年老いた家主と、忠実な数人の僕たちは、寂寞のうちに塵と化した。

叩露那は娶迷羅から授かった使命を帯びてこの地に赴き、城を一新し、城の近くの空き地に花園を囲った——花園とはいっても、ただ区切られた一角に人為的に草花を植えただけのことであった。そうしてその一角には、真っ白な雪蓮花クロナ カミラ¹⁴が植え尽くされた。もともと高山に生まれるはずの植物が、かくして暗赤色の平原に咲き広がった。太い茎の先で、どの花も俯き、地面に向かって開いている。内外それぞれ三枚ずつの花びらは、遠目にはいささか疎らで、赭穹しゃきゅうに覆われた大地にあって、美しくもあり、また惜しまれる。この花は娶迷羅が最も愛した花であったというが、今やその人は逝き、確かめようもなかった。

芒偶佐其垂家マングサキアと克倫須丹因家カルンスタンインの関係は、他の直系や分家のそれとはどこか微妙である。芒偶佐其垂の者はたとえ外出しても、自分の姓の後半、「克倫須丹因カルンスタンイン」の名を口にすることはほとんどない。本家を疎んでいるからではなく、ある種の「沈黙」を保っているのだ。克倫須丹因家の内紛はさして珍しいことではないが、芒偶佐其垂の者は決してそれに関わらない。芒偶佐其垂マングサキアには、公国の政治の盤上で駆け引きし、地位を求めることに熱を上げる者もない。彼らは代々芒偶佐其垂邸マングサキアで生まれ、しかし常に邸に籠もっているわけでもなく、代々、昔本家の家主娶迷羅から授かった務め——「記録すること」——を伝えている。

芒偶佐其垂家の血にそのような務めが流れているというより、彼女たちは生まれながらにして憂いを告げる珂瓏カロン¹⁵、帰咽の灯守りなのである。彼女たちは生と死の境を感じ取ることができ、魂が肉から離

¹¹ 克倫須丹因：Carnstaen。

¹² 叩露那・芒偶佐其垂：Chrona Mangusacia。

¹³ 娶迷羅・克倫須丹因：Carmilla Carnstaen。

¹⁴ 雪蓮花：Galanthus nivalis。後に妮媧利亜ニヴァーリアの名がこの花に由来することに注意。

¹⁵ 珂瓏：Charon。

れる瞬間を見分けることができる。家主^{カーミラ}娶迷羅が彼女たちに与えたのは、「消散」を感じ取る力、そして「消散」を記録する使命であった。

他の領と比べれば、ここでの暮らしはやや貧しいとも言えるかもしれない。それでも領民はたいてい去らない。芒偶佐其亜家^{マングサキア}の家主は、代々、その目で一人ひとりの領民の名を覚え、彼らが灰と化す時、最後の挽歌を歌ってくれるからだ。

芒偶佐其亜分家^{マングサキア}の歴代の家主は、一冊の神秘的なノートを持っている。五百年の人生で見届けた死を記したものである。挽歌のような筆致で、消散していく風月、凋みゆく雪蓮を記録している。これらのノートは、芒偶佐其亜邸^{マングサキア}の地下酒蔵の傍らにある特別な書庫に、初代から今に至るまで納められている。芒偶佐其亜家^{マングサキア}の者以外、誰も見たことがない。

芒偶佐其亜家^{マングサキア}が落ち着いてまもなく、娶迷羅^{カーミラ}は底捻魯窠公爵夫人^{テネブロス}の消失とともに消えた。芒偶佐其亜家^{マングサキア}の者以外、克倫須丹因^{カルンスタンイン}本家の者ですらその内情をよくは知らない。ただ、娶迷羅^{カーミラ}がある夜、ひとりの寝室から跡形もなく消え、部屋の調度ひとつ動いていなかったこと、そして叩露那宛ての手紙が一通だけ残されていたことだけを知っていた。

芒偶佐其亜家^{マングサキア}の各世代には、必ず一人の女性がひとつの力を得る——生と死の境で、帰咽川^{クイエス}の旅路に踏み出さんとするその瞬間に、その命の一生で最も美しい一瞬の記憶を見、その命の最後の渴望を感じるのである。この力が何の結果であるのかは分からない。それは芒偶佐其亜家^{マングサキア}を支配し、さほどの害はないものの、むしろ呪いと呼ぶべきものである——この力がもたらすのは、芒偶佐其亜家^{マングサキア}に代々伝わる、喪失に対する矛盾した感情である。彼らは喪失を恐れ、慣れ親しんだものが筆の下で挽歌となることを懼れる。その一方で、彼らは喪失に魅了され、弔いの中に一瞬の温もりを見出すことを求める。

この世代、落花の回想を聴く朧白花^{ろうはくか}¹⁶は、赭穹^{しゃきゅう}の影に覆われた暗い夜に生まれた。芒偶佐其亜家^{マングサキア}第四代家主の子として、曇天の下で静かに大地へ向かって咲き綻ぶ雪蓮花を迎えて生まれたのである。そこで家主諾底蘇^{ノクティス}¹⁷は彼女に妮媧利亚^{ニヴァーリア}¹⁸と名付けた。「妮媧利亚と呼ぼう」と、諾底蘇^{ノクティス}はそう言った。

なぜか、芒偶佐其亜家^{マングサキア}の子は多くない。死者の生を回味する力のせい、或いは娶迷羅^{カーミラ}が定めた使命のせい、「灯守り」の体には確かにそうした欠陥があるらしい。ゆえに妮媧利亚^{ニヴァーリア}の誕生も、例によって吉兆と見なされた。

妮媧利亚^{ニヴァーリア}がちょうど二十歳になった年、「灯守り」の力が修行のさなかに目覚めた。

地の利に応じて、芒偶佐其亜家^{マングサキア}の子はこの歳になると黒森林で修行を積みねばならない。今日はその修行の最終日、妮媧利亚^{ニヴァーリア}はまもなく芒邸^{マン}に戻ることを許され、この修行を終えようとしていた。彼女はぼんやりと、まさに凋みゆく一輪の叢林銀蓮花を眺めていた。花期を終えて静かに枯れていくのを。白に赤が滲む花びらはまだ巻き上がったままで、この花もまもなくこの世を去るのだろう。

そこで妮媧利亚^{ニヴァーリア}は手を伸ばし、その花に触れた。

¹⁶朧白花：Lilium Lunicandidum。地球にもこの花はあり、「カサブランカ」と呼ばれる。冥河の畔に生えたと伝えられる。花言葉は数によって変わる。

¹⁷諾底蘇：Noctis。

¹⁸妮媧利亚：Nivalia。前述の通り、妮媧利亚の名は雪蓮花に由来する。

彼女は花の記憶を見た。その短い命の一瞬、冬に土を破って芽吹き、^{しゃきゅう} 赭穹に覆われた境の地で茎と葉を伸ばし、やがて大地に向かって微笑んだその瞬間を。その体験は^{ニヴァーリア} 妮媞利亚を窒息させた。彼女は悲鳴をあげて地面に坐り込んだ。自分がその花になったかのように思い、一生に一度、花だけの瀕死を味わい、瞳は真っ赤に染まっていた。

家僕が^{ノクティス} 諾底蘇を連れて駆けつけた時、彼女はただそっと娘を抱き寄せた。

「これが^{マングサキア} 芒偶佐其亜家の伝承、使命、そして…恐らくは呪いでもあるのでしょう。きみはこれから、消散していく一つひとつの命を見つめ、自分の目で、彼らが最も懐かしむ瞬間を見届けなければならない。今回の修行が終わったら、きみはこの体験に耐えることを学びなさい。今日から、きみも^{マングサキア} 芒偶佐其亜家の灯守りなのだから」

この年、^{ノクティス} 諾底蘇は^{ニヴァーリア} 妮媞利亚に、この「灯守り」の力をどう制御するかを自ら教え始めた。制御しなければ、死にかける者の潮のような渴望と追憶に、すぐに呑み込まれてしまうだろう。そうして^{ニヴァーリア} 妮媞利亚は、いつ深く感じ入るかを選べるようになり、波頭に立って自分を呑み込ませるままにすることはなくなった。

三十歳の年、^{ニヴァーリア} 妮媞利亚に仕える一人の従者が病床に横たわっていた——^{マングサキア} 芒偶佐其亜家に数百年仕え、今ついに命の終わりを迎えようとしていた。血妖の去り方は人間とは違う。ただ塵と化し、風に運ばれる。ちょうど時が来て、風に掃き払われる落ち葉のように。

その従者はベッドに横たわり、指はすでに剥がれ落ち始め、もはや形も分からぬ灰になっていた。

^{ノクティス} 諾底蘇は^{ニヴァーリア} 妮媞利亚に進み出るように促した。「向き合いなさい。これもきみの人生の修行の一部であるはずだ」

^{ニヴァーリア} 妮媞利亚は寝台の傍らに坐り、従者のすでに凋み始めた手を握った。

予想に反して、彼女は^{しゃしよく てんきゅう} 赭色の天穹の下の温もりを感じた。この常世のような国で、自分の居場所があるという満足。追憶の中で、従者はいつか、領主のまだ幼い娘を背負い、^{マングサキア} 芒偶佐其亜邸の近くの花叢を歩いていた。彼女は一つの渴望を感じた。自分の名が覚えられたい、石に刻まれるのでも、紙に墨で書かれるのでもなく、ただ一人の人が、ずっと後になっても自分の名を呼んでくれるように。

^{ニヴァーリア} 妮媞利亚はただ「^{ヴィリア} 維利亚」と何度も何度も呼び続け、^{ヴィリア} 維利亚が完全に灰と化すまでそうしていた。

「^{ヴィリア} 維利亚」は、^{ニヴァーリア} 妮媞利亚の真新しいノート最初の単語であった。

それからの十五年、^{ニヴァーリア} 妮媞利亚は^{ノクティス} 諾底蘇に従い、領内の務めに慣れていった。

^{ニヴァーリア} 妮媞利亚四十五歳の年、^{ノクティス} 諾底蘇の黒い長髪に白いものが混じり始めた。すでに二百五十歳以上を生きている。血妖の中では大したことではないが、^{マングサキア} 芒偶佐其亜家の寿命はどうやら他の血妖より短いらしい。^{ノクティス} 諾底蘇は少し老いた。

それでも^{カルンスタンイン} 克倫須丹因本家の晩餐会は、当然のように期日どおりに開かれる。これは^{カルンスタンイン} 克倫須丹因本家とすべての分家にとって、年に一度の最も重要な社交の場であろう。もしどの分家が欠席すれば、恐らく「異常」とみなされる。

^{ノクティス} 諾底蘇が二百年近く出席してきた晩餐会に、今年は^{ニヴァーリア} 妮媞利亚が出席することになった。

「わたくしが？」^{ニヴァーリア} 妮媧利亜は一瞬呆けた。「わたくしは一度も——」

「きみは^{マンガサキア}芒偶佐其亜の後継者。いつかこれはあなたの務めになる。それが今日であって、何が悪いの？」

こうして^{ニヴァーリア} 妮媧利亜はひとり黒森林を抜け、公国北東の^{カルンスタンイン} 克倫須丹因領へと至った。彼女は^{マンガサキア} 芒偶佐其亜邸より遥かに大きなその城で一晩を過ごしたが、ひと言も発しなかった。^{カルンスタンイン} 克倫須丹因の現家主は彼女を一瞥し、問うた。「^{ノクティス} 諾底蘇は？」

「母は体を患い、父が看病しておりますゆえ、参れませんでした」

「そう」^{カルンスタンイン} 克倫須丹因家主は頷き、それきり彼女と言葉を交わさなかった。

^{ニヴァーリア} 妮媧利亜四十七歳の年、^{ノクティス} 諾底蘇の命もついに尽きようとしていた。

^{ニヴァーリア} 妮媧利亜が駆けつけた時、^{ノクティス} 諾底蘇はまだ書庫におり、その指はすでに凋み始めていた。

「^{ニヴ} 妮芙¹⁹」^{ノクティス} 諾底蘇は^{ニヴァーリア} 妮媧利亜に手を伸ばした。

^{ニヴァーリア} 妮媧利亜はその手を握り、灼けるような感情を感じた。ほとんど彼女を焼き尽くさんばかりの感情。それは^{クロナ} 叩露那・^{マンガサキア} 芒偶佐其亜から受け継がれ、^{カーミラ} 契迷羅・^{カルンスタンイン} 克倫須丹因が彼女たちに遺した、あの手紙の内容であった。

^{テネブロス} 底捻魯宰夫人とともに去った従者は、ただ去りゆく影であった。彼女は^{クロナ} 叩露那に、自分の去りゆくことを語った。

「なぜわたくしが去らねばならぬのかと問うているのはず。きみは、どこまでも問い詰める子だ。死にゆく者すべての渴望を見せ、消散せんとするすべてのものの、もっとも美しい回想を見せようとした。われわれはこの国土の上で、あまりにも長く見すぎた。あとどれほど見ねばならぬのか？ 東の境の大軍が踏み荒らすというのに。

「かのような美しい回想は、今のきみと、わたくしとを嫉妬させる。彼らは死の時に最後の美しさを迎え、去り、そしてこんな現実を残していく。

「けれど本当に怖い。消散する時、わたくしを覚えている者がみな、すでに別れを告げていることを。誰も覚えていないわたくしが、暗闇の中で一輪の雪蓮花が凋むように。

「だから、こんなにも意固地なわたくしは去ろうとしている。あの方に従うのが、恐らく最良の機会なのであろう。^{クイエス} 帰咽川の岸辺での最後の振り返りを残そう。

「きみと、きみの子孫に与える使命は、終わらなき苦しみを与えることではない。世の重みを覚えさせることだ。きみは、わたくしに代わって消散した者たちを覚え、生きた証しを覚えていてくれる。

「もしきみの子孫がこの過去を問うなら、きみの子孫がこれらの意味を探し求めるなら、こう告げなさい——探し求めることこそが、意味であると」

^{ノクティス} 諾底蘇はすでに消散していた。ただ床一面の灰と、傍らの机の上のペンダントが残されていた。

そのペンダントは雪蓮花の形で、^{マンガサキア} 芒偶佐其亜歴代の家主の間で代々受け継がれていた。

^{ニヴ} ^{ニヴァーリア} 妮芙：Niv。妮媧利亜の愛称。

ニヴァーリア
妮媞莉亜は書庫で一晩中ページを繰った。他の家僕が走り回る喧噪の中で、初代の家主^{クロナ}叩露那のノートから第四代の^{ノクティス}諾底蘇のものまで、読み続けた。

この年、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜・^{マングサキア}芒偶佐其亜・^{カルンスタンイン}克倫須丹因²⁰は第五代子爵となった。

^{マングサキア}芒偶佐其亜家の家主は、折々にひとり領内の隅々を歩まねばならない。城を出て、^{クイエス}帰咽川に沿って北へしばらく行き、黒森林の縁のあの木の下に至り、さらに東へ、黒森林の境に沿って、^{ユラン}露蘭高原の山麓を遥かに眺めながら、かの境界碑の前まで行き、さらに南へ、領地の境に沿って城へ戻る。大路はない。森の柔らかな土を踏み、河岸に散らばる砕けた石の傍らを歩く。これを「巡境」と呼ぶ。

^{ニヴァーリア}妮媞莉亜の最初の巡境は五十歳の年であった。ノートに十数行を記した。領民の名だけでなく、道すがら見た多くの命の注釈でもあった。

それからの毎年、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は巡境を一度行い、巡境の傍ら修行の課題もこなした。定められた日のこともあれば、ただ気まぐれに、月光の下で城を出ることもあった。

^{クイエイヴェナトゥス}帰咽維那突川が^{マングサキア}芒偶佐其亜領の最も東南の端に流れ着くところに、多くの石が積まれている。刻まれた文字は、あるものはまだ角が分明で、あるものは歳月に磨かれ模糊としている。もはや人の手によるものか、元からそこにあったものか、見分けのつかぬ石もある。^{ニヴァーリア}妮媞莉亜もそこにいくつかの石を置いた。七十三歳の年、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は石陣の傍らで、一人の瀕死の人間に出会った。若い女で、櫂の下に倒れ、全身に傷を負っていた。恐らく西部の無人区に巣食う流竄魔術師が、違法な実験に使ったものだと、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は一目で見て取った。この人間は、流竄魔術師が体内に植えた業火に焼かれ、正気を失い、どこからか逃げ出し、ここで死を待っていたのだった。

^{ニヴァーリア}妮媞莉亜はかがみ込み、その顔を撫でようとした。人間はふいに目を見開き、手に火を集めて投げつけようとした——まさにその時、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜の顔を見た。

「あなたは…血妖？」

^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は答えた。「^{マングサキア}芒偶佐其亜子爵と申し、ここの領主です」

手当てをしようとも、届け出ようとも、もう遅かった。^{ニヴァーリア}妮媞莉亜はただ傍らに坐り、夜になるまで寄り添った。彼女の渴望と追憶が^{ニヴァーリア}妮媞莉亜の意識に流れ込み、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜のノートに記された。

^{ニヴァーリア}妮媞莉亜九十八歳の年、これも巡境の途上で、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は^{クイエイヴェナトゥス}帰咽維那突川の畔に坐り、長いこと考えた。

^{カーミラ}契迷羅は去った。自分の最期を見出したのだろうか？

百十歳の年、^{ニヴァーリア}妮媞莉亜は巡境の途上で、聳え立つ^{ユラン}露蘭高原を眺めた。

探し求めることこそが意味であるのなら。

彼女は去ろうとしている。逃げるのでも、諦めるのでも、去るのでもない。ただ外へ出て、公国の境で見てみたいだけだ。帳面にまだ記していないものを見、^{カーミラ}契迷羅の言う「探し求めること」を見、先祖^{デネブロス}底捻魯率^{しゃきゅう}がまだ 赭穹 を設ける前の姿を見たいだけだ。彼女は一つの石を、^{クイエイヴェナトゥス}帰咽維那突川が領地の東南の境に流れ着くところの石陣に置いた。一文字も刻まずに。

^{ニヴァーリア}ニヴァーリア ^{マングサキア}マングサキア ^{カルンスタンイン}カルンスタンイン
²⁰妮媞莉亜・芒偶佐其亜・克倫須丹因：Nivalia Mangusacia Carnstaen。読みは/niva:lia.māyusa:k'ia.ka:ʃstāi/。

こうして彼女は、歴代の家主がふいに諦観するように、訶古稜^{ハコロシ}姐妹会に定期離境を申請した。
克倫須丹^{カルンスタンイン}因本家が前面に立って担保した。家主は言った——行かせてやれ、その分家は昔からこうなの
だ、と。

これより毎年、しばらくの間、芒偶佐其亜^{マングサキア}の家主はまた外出する。彼女は灯を提げて芒偶佐其亜^{マングサキア}の門
前に立ち、今年の最後のいくつかの務めを言い置き、身を翻して^{しゃきゅう}赭穹の下へと歩み入る。

妮媧^{ニヴァーリア}利亜の髪は栗黒色で、青いリボンで後ろに束ね、丸い髻を作ってから背中に垂らし、腰まで届い
ている。もみあげの髪は三つ編みにされ、やや単調な後頭部を飾っている。灰青色の目はどこか憂い
を帯び、感情が揺れる時には赤みを帯びる。透明なほどに青白い肌は、もはや外界が血妖に抱くステ
レオタイプとなっていた。芒偶佐其亜^{マングサキア}領にいる時は、いつも黒地に赤い飾りがついた宮廷風のロング
ドレスをまとい、その側には白い紐が幾本か掛かっているだけを装いとし、丈はちょうどふくらはぎ
の中ほどで、このドレスは美しく見えるうえに動きの邪魔にもならない。足元の靴も恐らく同じ理由
からであろう。

外出する時は、妮媧^{ニヴァーリア}利亜はややゆったりとしたベージュのトレンチコートを羽織る。コートの襟はや
や高く、きちんと着ればちょうど顎と口を覆い、首から下げた赤い雪蓮花形のペンダントも隠して見
えなくなる。コートとともにフードも被り、最も目立つ血妖の特徴をできるだけ隠している。

妮媧^{ニヴァーリア}利亜は芒偶佐其亜^{マングサキア}短剣を持っている。かつて^{カーミラ}娑迷羅が^{クロナ}叩露那に授けたものである。この短剣は刃
に鋸歯があり、刀身は銀鍍金で、妮媧^{ニヴァーリア}利亜は護身用に使っている。また、長さ一步²¹の広刃の^{クイエ}帰咽
ツヴァイヘンダー^{ツヴァイヘンダー}両手剣²²を持っており、普段はコートの下に隠している。二十歳で剣術の修行を始めてから、この
ツヴァイヘンダー^{ツヴァイヘンダー}両手剣²²はいつも遠出のお供をしてきた。

妮媧^{ニヴァーリア}利亜は三度目に^{ハコロシ}訶古稜を離れ、^{クイエス}帰咽川に沿って公国の腹地を抜け、東南へと向かった。

彼女は見てみたかった。^{クイエス}帰咽川が流れ帰るその場所が、いったいどのようなものなのかを。

^{ロマ}露末、^{エリン}乙林=婆但行省の境、その時月は雲に隠れ、辺りは一面の闇であった。

妮媧^{ニヴァーリア}利亜は遠くに焚き火を見つけ、近づこうとしたその時、短剣が背後に突きつけられた。提灯が地
面に落ち、女の声が彼女を制した。「おまえ、血妖かな？」

妮媧^{ニヴァーリア}利亜は手を挙げた。「人は食べませんの、わたくし」

「んな言葉何度も聞いたぞ」

妮媧^{ニヴァーリア}利亜はしばらく黙った。背後にいる者がまた言った。「見たんぞ。おまえ、死にかけた者たちに近
づくのを」

「説明は甚だしく難しいのですが…腰につけているノートをご覧くださいませんか？」

「なんで信じなきゃいけないの？」

「ご随意に、どうぞなさってください」

²¹一步：約 1.52 メートル。

²²ツヴァイヘンダー^{ツヴァイヘンダー}両手剣²²：Zweihänder。また、独逸語の Zweihänder とも。

背後にいる者はしばらく躊躇したが、結局殺さなかった。彼女は手を^{ニヴァーリア}妮媧利亜の腰に回し、ノートを取った。^{ニヴァーリア}妮媧利亜は戦慄を感じた。恐れではない。

「焚き火の方へ歩け」^{ニヴァーリア}妮媧利亜の腰から手は離れない。「ノートを見るには光が要る」

^{ニヴァーリア}妮媧利亜は従順に、刃先の脅威の下で焚き火に近づいた。背後にいる者は手を引き、片手でぎこちなくページを繰った。「どうか壊さないでくださいませ」

「何だこれ？」

「わたくし一族には、特殊な能力がありまして…とにかく、死にゆく者の一生で最も幸福な瞬間を集めております。彼らを覚えていたいのです」

その者は^{ニヴァーリア}妮媧利亜を木に縛りつけ、乱暴にフードを剥ぎ取り、焚き火の向かいに座って一晩中彼女を見張った。手は腰に差し戻した短剣に何度も触れては、また下ろした。

夜が明けると、彼女は短剣を手^{ニヴァーリア}に^{ニヴァーリア}妮媧利亜へと歩み寄った。^{ニヴァーリア}妮媧利亜が人生——或いは、妖生を回想していたその時、彼女を縛っていた縄が短剣で切られた。

「名は？」

^{ニヴァーリア}「妮媧利亜と呼ばばよろしいのです」

「行け」

^{ニヴァーリア}妮媧利亜は振り返り、やや驚いて言った。「殺すおつもりは、なくなったのですか？」

「気が変わる前にね」

^{ニヴァーリア}妮媧利亜は少し笑った。「お名前を伺ってもよろしいですか？」

「さっさと消えろ」

^{タイチ}地逸と^{ハコロン}訶古稜の戦争も歴史の長河に遠ざかってから、境での直接の衝突も次第に減っていった。寿命の長い血妖でさえ、継承の中で人間とともに多くの恩讐を忘れていった。次第に、折に触れて公国の制度に不満を抱く血妖が人間の領地へ流れ込み、そのうちの一部は暮らしの術もなく、秘かに人を殺して血を吸って生き延びるようになった。そうした血妖を捕殺するために、血妖狩人が生まれた。

^{ニヴァーリア}妮媧利亜があ的那天に出会ったのは、恐らくそうした血妖狩人の一人であろう。

この血妖狩人は、どうやら^{ニヴァーリア}妮媧利亜を追って^{オテンス}予天市²³まで来たらしい。^{ニヴァーリア}妮媧利亜は気に留めず、ただ^{オテンス}予天市で^{カーミラ}娑迷羅に関する蛛糸馬跡を探していた。幸い、当年^{カーミラ}娑迷羅の行方は跡形もないわけではなかった。各地に血妖の伝説があり、^{タイチ}地逸と^{ハコロン}訶古稜の交戦の折、一人の血妖魔術師が貴族の女性と交際し、深夜に密会し、貴族の女性の血を吸い干してから都市を去ったという。^{ニヴァーリア}妮媧利亜は半月にわたり各地の血妖伝説を考察した後、旅立った。^{ロマ}露末城の郊外へと探しに行くつもりである。

道中、やはり半月前の血妖狩人に会った。同行ではなく、ただ^{ニヴァーリア}妮媧利亜は、誰かが遠くから尾行しているのを感じ取れた。

^{オテンス}
²³予天市：Othens。

芒偶佐其垂家の血脈において、提灯人は自ら近所の生命波動を感知することもできる。これが「灯守りの灯提げ」という術である。妮媧利亜は感知を外へ延ばした。その範囲内で、彼女はすべての生物の状態を感知できる。誰が死につつあるのか、誰の息律が変わっているのか、或いは生命そのものの存在状態までもが、感官に映し出される。戦闘中、この魔術は相手の攻撃意図も感じさせてくれる。いつ相手が攻撃を仕掛けようとしているのか、いつ自分に殺意を抱いているのか…

最初は、一人の尾行だった。恐らくあの血妖狩人であろう。この半月の間、妮媧利亜は何度か自分の近くで活動している血妖狩人に遭遇した。彼女は毎回、妮媧利亜が大人しくしているかを監督していると言い、妮媧利亜も彼女の好きにさせていた。

しかし今回は、いつからか、妮媧利亜は他にも尾行している者がいるかもしれないと感じた。そしてあの狩人とは違い、これらの者からは殺意が感じられた。

血妖狩人はいずれも血妖を粛清の対象とする狩人であり、武器と戦闘技能の上で血妖に特化しており、また人間を傷つけられないため、人間と格闘する時は通常、普通の人間より僅かに優位に立つ程度である。妮媧利亜は思わずつい心配になった。

狩人が焚き火を起し、食事を始めた時、妮媧利亜が自分の頭上近くの枝に座っているのを感じ取れた。

三人が現れたのは、その時であった。狩人が何をするつもりかと怒鳴りつけると、彼らは応えず、襲いかかってきた。狩人は一人を蹴り倒し、もう一人が背後から彼女の手を掴み、魔術で手を縛り上げた。

妮媧利亜は木から飛び降り、その魔術師を蹴り飛ばし、両手剣で三人目を払い退けた。蹴り倒された者がまた起き上がり、匕首で妮媧利亜に一撃を加えようとした。妮媧利亜は躲し、空中に美しい弧を描き、提灯が腰帯に当たって清い音を立てた。妮媧利亜は着地し、足で地面を蹴って、両手剣を振り回して薙ぎ返し、その者に傷を負わせた。こうして距離を取った後、妮媧利亜は三人の前に、狩人に背を向けて構えを取った。フードが滑り落ち、血赤色の瞳孔と尖った歯が露わになった。

「あまりに長く食事をしていないのは困りものですね」妮媧利亜は横顔を向け、三人の襲撃者に歯を剥き出した。「あなたたちも、彼女と一緒にわたくしに吸い干されたいのでしょうか？」

襲撃者が慌てて逃げ去った後、妮媧利亜はまたフードを被り、コートの襟を引き締め、余所を見た。「ずっと前から、彼らがあなたを尾行しているのに気づいておりました」

その狩人は深く息を吸い、何か決心したように、妮媧利亜に向かって、ほとんど叫ぶように言った。「うちの血を吸いたいなら吸え！」

妮媧利亜は一瞬呆け、彼女がまた小さな声で、少し忸怩たる様子で言うのを聞いた。「何しろ、おまえこそ命を救った者だから」

そして狩人は妮媧利亜が笑うのを見た。とても軽い笑い声が襟越しに伝わってきた。「お名前を伺ってもよろしいですか？」

リン・リンゼロッテ・ギェンテル
「林…林邪露諦・瑗体²⁴」

²⁴林邪露諦・瑗体：Linselotte Guenther.

^{ニヴァーリア}妮媞利亜は黒い食べ物をいくつか取り出した。恐らく血妖の携帯食であろう。彼女は座り、少しずつ口に運んだ。

この夜、^{リンゼロッテ}林邪露諦は安らかな眠りについた。

「確か…^{カルンスタンイン}克倫須丹因家の者だな」

「どうして分かるのですか？」

「^{ツヴァイヘンダー}両手剣の技、とてもお上手だった」

^{ニヴァーリア}妮媞利亜は彼女に^{カーテシー}屈膝礼をした。「改めて自己紹介させてください。^{ニヴァーリア}・^{マングサキア}芒偶佐其亜・^{カルンスタンイン}克倫須丹因、^{マングサキア}芒偶佐其亜分家の第五代家主です」

「正直に、老いぼれからんな話を聞いただけだ」

「では、今こそあなたをご覧になりました。これもわたくしの幸いと言えましょう、殺し続けようとは思わなかったこととかを」

^{リンゼロッテ}林邪露諦は気まずそうに、手を短剣に置き、すぐにその仕草が失礼かもしれないと感じて、手を背中に回し、^{ニヴァーリア}妮媞利亜から顔を背けて呟いた。「どこに行っても、貴族というのは面倒くさいな」

そしてまた問うた。「^{ロマ}露末城へ行くのか？」

「仰る通りです」

「何をしに？」

「先祖が遺したものをいくつか探したいのです」

「それで、その品々で^{バイヤン}幡鄒²⁵を支配すると？」

「よく仰いますね。わたくしは今、自分の領民を治めるだけでも精一杯です。巡境であれほど遠くまで歩けと言われたら、とても耐えられませんの」

「巡境？」

「領地をぐるりと一回りすることです。わたくしには恐らく三日も歩かねばなりませんの」

「あっ、そうだ、ちょ…ちょうどうちも^{ロマ}露末城へ行くところだ。引き続き…おまえを監視させてもらおう！」

「どうぞ、ご随意になさってください」

^{リンゼロッテ}林邪露諦は少し不満だった。自分が子供のようにあしらわれた気がした。実際その通りで、年だけを言えば確か^{ニヴァーリア}妮媞利亜は彼女より百年近く年上である。

^{イストラス}伊蘇多刺市²⁶に着くと、^{リンゼロッテ}林邪露諦は馬車を借り、二人は馬車で^{ロマ}露末城へとやって来た。

ある黄昏に、^{ニヴァーリア}妮媞利亜と、彼女につき従う^{リンゼロッテ}林邪露諦は、ついに^{ロマ}露末城郊外の^{アニマ}阿尼麻廢堂の前にたどり着いた。

^{バイヤン}幡鄒²⁵：^{タイチ}Baiarn。地逸南部の地理的な区域で、地形は主に丘陵である。

^{イストラス}伊蘇多刺市²⁶：Istras。

「ここだな？」

「さようございます」

「探しもの、この中にあるの？」

「必ずしも。何も得られないこともなれるのかもしれませんが」

大門はすでになく、二人は大門であった拱口から^{テンブラン}占布嵐へと入った。^{ニヴァーリア}妮媞利亜の靴がぎしぎしと、砕けた石を踏み、音を立てた。

古典地逸式^{タイチ}の特色であろう。或いは古典地逸式^{タイチ}建築がこれらの廃堂を模して建てられたのか。外の聳え立つ尖塔は、内部に入ると高い穹窿となり、光も届かぬほどに高い。窓と思しき位置のガラスはあまり光を通さず、古代文字が刻まれ、暗闇の中で幽かな青い光を放っている。地面には様々な這い回った痕跡があり、かなりの年代を感じさせる。そして正体の分からぬ碎屑も散らばっている。

^{ニヴァーリア}妮媞利亜は堂内の古びた痕跡を注意深く探し、円堂で自分と^{リンゼロッテ}林邪露諦の足音が反響するのを聴き、回廊で先祖の足跡を踏み、指先で壁の文字に触れ、地下の血繭^{けつけん}のところへ来て、空っぽの血繭^{けつけん}を眺めて呆けた。

^{カーミラ}婁迷羅の手紙も、遺物も、見つからなかった。

ただ数百年眠り続け、消散した者たちが世に残した静寂のみ。

^{ニヴァーリア}妮媞利亜は円堂に戻り、中央の演壇のような場所に座り、背にもたれ、腰からノートを解いてページを繰り始めた。

彼女は自分が記した名を一つひとつ目で追い、そして最新のページに^{カーミラ}婁迷羅と^{リンゼロッテ}林邪露諦の名を記した。

^{リンゼロッテ}林邪露諦・^{ギュンテル}瑗体、今回の離境で出会った良き友、血妖狩人である。

^{カーミラ}婁迷羅・^{カルンスタンイン}克倫須丹因、何と書けばよいのであろうか。

^{ニヴァーリア}妮媞利亜の笑うほどに、眼角に古代文字の間の落書きを捉えた。「ここにありますの」

彼女は^{リンゼロッテ}林邪露諦を呼び寄せて一緒に近くで見た。壁には方正な筆跡でこう書かれていた。「^{カーミラ}婁迷羅・^{カルンスタンイン}克倫須丹因」。

^{リンゼロッテ}林邪露諦は少し失望した。「これだけ？」

^{ニヴァーリア}妮媞利亜はその落書きに恭しく^{カーテシー}屈膝礼をし、それから振り返りもせず言った。「これだけです」

「なんだよ——」^{リンゼロッテ}林邪露諦は声を張り上げて抗議した。

「しっ——」^{ニヴァーリア}妮媞利亜は人差し指を唇に当てた。「もう分かった気がします」

「何が分かった？」^{リンゼロッテ}林邪露諦はすでに、無駄足だったのではないかと思い始めていた。

「これが答えだと思います。家主は…もともと何も遺すつもりはなかったのです」

「一体…」

「そうです。彼女は血妖が一生穹窿の下に留まって出てこないことを恐れていた。誰かが提灯を提げて外へ出て、ただ外を見てくる必要があった。人間のいる場所を見に来るために。自分が何であるかを忘れないでほしいと願っていたのです」

^{リンゼロッテ}
林邪露諦も黙った。

「これからどこへ行くんだ？」

「これからのことです」^{ニヴァーリア} 妮媞利亞は微笑んで、両手を体の脇で重ねた。「^{ハコロン} 訶古稜公国へ戻るつもりです」

「おまえ…もう戻るのか？」^{リンゼロッテ} 林邪露諦の声は、どこか落胆しているようでもあった。

「これで戻る支度をしております。道中、大変お世話になってありがとうございました」

^{リンゼロッテ}
林邪露諦は口を尖らせた。

「そう、次にお会いした時は、『^{ロッテ} 露諦』とお呼びしてもよろしいでしょうか。その方が親しみが湧くかと思ひまして」

^{リンゼロッテ}
林邪露諦の顔がまた少し緩んだ。「『次』？」

「ええ、毎年こうして外へ出て見て回ることになるかもしれません」^{ニヴァーリア} 妮媞利亞の口元が上がり、目が細まり、灰青色の瞳孔に一瞬赤が走った。

「じゃあうち、普段 ^{ミューニヒェン} 未尼抻²⁷にいるけど…別に待ったりはしないからな！」

「はい、承知しました」

二人は^{オテンス} 予天市の城門の外で別れた。

^{オテンス} 予天の城壁は暮色の中で色褪せ、元が青灰色だったのか黄褐色だったのか、もはや見分けがつかない。狭間では、西へ傾く夕日が名残りを惜しむように留まっている。北西から吹く風がすでに感じられ、^{エリン} 乙林= ^{バダン} 婆但の秋の気配を運んでくる。^{ダノッブ} 沱納川は上流の土の香りを載せて流れ下る。^{ニヴァーリア} 妮媞利亞は風の中に焼けるような匂いを感じた。恐らく遠くの麦畑で藁をを焼いているのだろう。^{ハコロン} 訶古稜公国にはこの匂いはない。彼女は手を伸ばし、風を指の間にくぐらせながら、思っていた。恐らくこの風こそが、空の高みに大きな血赤色の雲を^{オテンス} 予天へと押し流しているのだろう、と。

二人は城門の外の轍の上を歩いた。^{リンゼロッテ} 林邪露諦は明らかに道が違うのに、それでも^{ニヴァーリア} 妮媞利亞と共に歩こうと言って聞かなかった。^{ニヴァーリア} 妮媞利亞のフードが風に飛ばされ、彼女はすぐに手で被り直し、栗黒色の長い髪を隠した。その時、黙っていた^{リンゼロッテ} 林邪露諦が口を開いた。

「来年……本当に戻ってくるのか？」

「来年は多分まずここを通り、それから北へ向かいます」

^{リンゼロッテ}
林邪露諦は顔を上げ、空の血赤色の境界が消えていくのを眺めた。

「その…」

^{ミューニヒェン} ^{バイヤン}
²⁷ 未尼抻：Muenichenn。幡鄆州の首府。

「どうかしましたか？」

「道中、厚着していけ。ここ数日は冷えるはずだ」

「お気遣いありがとうございます。それに、日も暮れてきましたし、もうお送りいただかなくて大丈夫です。夜に出掛けると冷えますから」^{ニヴァーリア} 妮媧利亜は振り返り、微笑んで彼女に言った。

「じゃあ、ここまで」

「はい、またお会いできるのを楽しみにしております」

^{ニヴァーリア} 妮媧利亜はカー^{屈膝礼}テシーをし、顔を上げ、あの血赤色の境界を眺めた。そして、ゆっくりとした歩みから大股へと変え、次第に^{リンゼロッテ}林邪露諦との距離を広げていった。

^{リンゼロッテ} 林邪露諦は立ち止まり、癖で右手を腰に当てて短剣に添え、体重を片側にかけ、^{ニヴァーリア} 妮媧利亜の背中を眺めていた。

^{ニヴァーリア} 妮媧利亜のトレンチコートと、^{リンゼロッテ} 林邪露諦のマントが、風の中ではためいていた。

作者 Archive Aeonivacuum ・ ライセンス CC BY-NC-SA 4.0